

12, 7共産同(戦旗派)政治集会基調報告

(報告者・西田輝)

- ☆ 闘りアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦へ転化せよ!!
- ☆ 「上からの内乱」攻撃に正面对決し、無数の国内階級激突を組織し、革命的内乱の時代を切り開け!!
- ☆ 部落民・沖縄人・在日朝鮮人の決起を「血債にかけて」受けとめ、日帝打倒に向けた単一の戦線を構築せよ!!
- ☆ 社会排外主義を打倒し、日和見主義・経済主義を許さず、日帝打倒に向け革命勢力を統合せよ!!
- ☆ オ2次ブンド諸派との闘いを強め全ゆるスターリン主義への屈服と闘い抜き同盟(戦旗派)建設に勝利せよ!!
- ☆ カクマル主義者との闘いを強化し、一切の解党派を粉砕し、全国中央集権党を建設せよ!!

一章 経済主義、清算主義と闘い日帝打倒 に向け全線戦の最先頭で闘い抜く

全ての労働者、学生、人民の皆さん！
又わが同盟と共に闘う戦闘的労働者、学生、人民諸君！

共産主義者同盟（戦旗派）を代表して基調報告を行いたいと思います。

まず最初に、73年6月12日以降同盟から脱落した日向一城山二つのカクマル主義と闘い抜き、わが同盟の到達地平の防衛、日本階級闘争の歴史的発展段階の防衛と発展のためにその持てる力の最大限を発揮して闘い抜いてきたことから述べたいと思います。

それは第一に安保一沖繩という「二つの決戦」を闘い抜き、この闘いの意義をガツチリと受けとめ、闘いの中で萌芽的に見られた日本革命の現実性を様々を要素として対象化し、この地平を防衛しながら70年代戦略的反攻戦取に向けて闘い抜くという党的見地の実践である。70年安保一72年沖繩闘争はその階級的高揚期の政治的性格として日本におけるプロレタリア革命の具体的内容を様々な側面、様々な要素において観念ではない、現実の闘いの実態の中にさし示した。例えばそれは、プロレタリアート人民の階級的団結を表現するプロレタリア国際主義の歴史の飛躍という問題であり、又歴史におけるプロレタリアートの暴力実践の正当性の深化・発展というものである。

プロレタリア国際主義の内容が日帝の侵略反革命の現実性とこれに対して闘い抜くアジア人民の決起の現実性という中で、帝国主義的抑圧民族内部のプロレタリアートであるということが避けることのできない現実性として鋭く問われ、これに革命的に答えきつていくものとして深化された。それは「七・七華青闘争」を直接的契機として、この華青闘争の糾弾を受けとめ、同様に反日帝に立ちあがる南朝鮮人民、タイ人民の闘いを受けとめ、帝国主義的抑圧民族としての自覚の下に血債にかけて連帯し、このことを通して日帝を打倒していくという現実の問題なのである。

又侵略反革命体制の中において差別され、虐げられ抹殺攻撃にさらされている部落民、沖繩人、在日朝鮮人、アイヌ等被抑圧人民、被差別大衆の現実の決起のなかで彼らの糾弾と告発を受けとめ労働者人民一般の差別者、抑圧者としての過去および現在を血債し、彼らの闘いを支持し抜くことのなかから階級的団結を強化していくという問題である。

更にプロレタリアの暴力の内実が敵権力の破防法弾圧体制、過激派圧殺攻撃という国家の暴力装置の暴権発動という形における階級の本質の全人民的暴

露の中で、これに対抗する党と革命勢力の武装を要求し、プロレタリア革命の基本問題として暴力が大衆的、階級的力をもつて問い返されたことである。全学連一全共闘、反戦、などの拠点闘争、街頭闘争の拡大によつて機動隊との武装闘争が激化し、三里塚、渋谷、神田に示される武装遊撃戦に結実化し全人民の総武装を革命の問題として突き出したといえる。機動隊セン滅の実現によつてブルジョア国家権力の暴力的解体の確実な第一歩を勝ちとつたことである。又同時に帝国主義国家権力の支柱たる帝国主義軍隊の内部より革命的反乱兵士が表われその解体の第一歩が勝ちとられたのである。すなわち党と革命勢力の密集した力によつて機動隊を包囲セン滅し引き出された自衛隊をも内外から解体する闘いの現実性を獲得したのである。

われわれは「血債にかけて闘う思想性」組織性「機動隊セン滅の暴力性」組織性」をこの革命の現実性に対する革命的共産主義者の責務の問題として把え返し、同盟戦旗派建設と革命勢力構築の絶対的基準としていかなければならないのである。

第二には、革命の現実性のなかで問われた二つの基準を立場や思想にとどまることなく革命的に深化して把え返し、同盟の主體的な日本革命戦略の内容の深化・豊富化に結実化させ闘い抜いてきたことである。われわれは現代過渡期世界に存在している帝国主義国、日本の革命の問題として把え、日帝打倒の戦略的総路線を「闘うアジア人民と連帯し、日帝のアジア侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦へ転化せよ」、「安保粉砕一日本打倒」、「沖繩解放一安保粉砕一日本打倒・米帝放逐」、「朝鮮植民地化阻止一日本打倒一南北革命統一」、「部落解放一日本打倒一日本打倒」として確定し闘いの指針にしてきた。

現在日帝はアジア侵略反革命、朝鮮植民地化攻撃を強め、そのための国内体制づくりを侵略反革命体制として強権的に打ち固めんとしている。日帝は侵略反革命体制づくりにより不可欠な人民差別分断攻撃を強化し、一方では部落民、沖繩人、在日朝鮮人、「障害者」、女性等被抑圧人民、被差別大衆に差別、抹殺攻撃を強め、人民分断による階級支配の犠牲とし、他方では一部労働貴族を買収しこの幻想を拡大させ帝国主義労働運動派を自己の権力基礎とする攻撃にでている。そしてこの侵略反革命、差別分断攻撃に対して域内平和を突破し闘い抜く革命的左翼の闘い、被抑圧人民の闘いには、小選挙区制、刑法改悪、保安処分新設等をもつての「上からの内乱」攻撃を強め、統治形態のポナバルチズムの展開をもつて圧殺せんとしている。われわれはプロレタリア日本革命が世界史の帝国主義段階における帝国主義国における革命であるという問題を鮮明にした上で、レーニン「帝国主義戦争を内乱へ」の戦略スローガンを「革

「民族的祖国敗北主義」「民族問題」「農業農民問題」の諸原則をしつかりとふまえ、この発展として日本革命戦略を実現していかなばならないのである。又この日本革命の重要な水路として部落解放闘争、沖繩解放闘争、朝鮮連帯闘争、「障害者」解放闘争、女性解放闘争を取り組み実践してきたのである。又日帝の「上からの内乱」攻撃に真つ向うから対決し日和見主義者の敵前逃亡を粉碎して、公然たる内乱の開始、「内乱」蜂起・内戦」の戦取に向け国内階級激突戦勝利の陣型を着実に闘いつてきたのである。

第三に、今日の日本階級闘争の激烈な発展のただ中で旧来の域内平和主義者は社会排外主義に転落し、革命派に対する反革命敵対を強めてくることの中で、この社会排外主義者との闘いを日本革命に向けた絶対不可欠な課題として位置づけ実践してきたことである。彼らは日帝の侵略反革命に屈服し差別分断攻撃に屈服し、人民戦線派として革命的左翼に対する反革命的防波堤の役割を果している。社共は「金大中事件」に示される如く大国主義を日帝と共に唱和し帝国主義的抑圧民族としての自己を正当化し増々社会排外主義へ純化してきた。本年9/19集会に見られる排外主義的墮落、すなわち「韓国はフアンソヨ、日本は民主」なる構図の下に南朝鮮に対して侮蔑するといふ腐敗した姿をとつている。又国内差別分断攻撃に対しても、労働者あるいはプロレタリア本隊であることをもつて差別を正当化し差別者、抑圧者として立ち現われていることである。日共は部落解放の闘いに対して労働者人民内部の「ねたみ」を利用して部落解放同盟襲撃、狭山差別裁判弾闘争破壊をなす反革命フアンソと酷似した姿をとり、カクマルは破防法弁護団襲撃、狭山闘争差別介入等という形で排外主義的墮落を強めているのである。

われわれは部落解放、朝鮮連帯等被抑圧人民、民族との連帯の責任にかけてこれら社共、カクマル、社会排外主義と闘い抜いてきた。とりわけ日共、カクマルの部落解放同盟への反革命襲撃を含む差別。排外主義攻撃に部落解放戦線は勿論のこと、彼らの存在する労働戦線内部においても対決しきり、革命的共産主義者の責任を痛感し全力で闘ってきたのである。

そして第四に、わが同盟戦旗派建設のために全力で闘い抜いてきたことである。同盟戦旗派結成3年間の闘いの中で、戦旗派結成当時不可避に孕まざるをえなかつた左翼反対派の限界を克服できず思想的、組織的にカクマルに屈服し、わが同盟から脱落していつた日向カクマル主義者との闘いの問題である。われわれは「上からの解党派」(日向)「下からの解党派」(城山)と党組織建設を巡つて闘い抜き、ようやくしてこの同盟内分裂に勝利する地平を獲得しつづつあることである。このカクマル主義者が「被

抑圧人民との連帯」の闘いあるいは「武装遊撃戦」の組織化と、これを実現させうる党建設という闘いから逃亡し、「プロレタリアート以外は革命的ではない」という差別排外主義を公然化させ、「組合運動の原則的闘いから出発する」という合法主義、経済主義を強め反革命の沼地へと落ち込んでいつた。とくに日向一派は差別者日向の墮落をそつくり体現し、部落解放闘争において二審判決当日、「石川青年無罪判決勝利」なるピラを持つてくるという日共。カクマルそのものの帝国主義的墮落を示す存在になり果てたのである。われわれは日向一派との闘いの中で、旧来の同盟戦旗派の歴史的弱点を徹底的に自己批判し血債にかけて被抑圧人民、被差別大衆の闘いに連帯してきた。わが同盟はこのカクマル分子の墮落を越えて部落解放、沖繩解放、「障害者」解放、女性解放の闘いを強め、これら闘う人民の同盟への結集を勝ちとつてきているのである。又日向一派は9・19日和見主義者四トロ、右翼構改プロ青と野合し社共の排外主義集会に加担し、11・18には大右派連合「70年代沼地派ブロック」の反動的尖兵として政治闘争、武装闘争に敵対しているのである。

以上述べてきたように、わが同盟は同盟の分裂以降、①安保一沖繩闘争の闘いの継承と問われる「二つの基準」の徹底した実践、②日本革命に向けた戦略的総路線獲得のための闘いと獲得された総路線の実践、③社共・カクマル社会排外主義者とのセン滅戦の強化、日和見主義、中間主義(清算主義、経済主義)との闘いを通じた革命勢力の構築、④同盟戦旗派建設のための闘い、戦闘的労働者や部落民、沖繩人等被抑圧人民に立脚した党建設の実践、を自己の主体的任務の基本となし闘い抜いてきたのである。

二章 現代過渡期世界の危機と日本一世界階級闘争の戦略的前進に向けて

② 現代過渡期世界の成立と危機の不可避性

現代過渡期世界はその矛盾を深め、プロレタリア世界革命の客観的条件を成熟させつつある。現代過渡期世界の今日の危機はその成立のもつ本質的な反労働者のな性格にある。すなわち現代過渡期世界は世界帝国主義戦争のフアンソム国家の敗北として決着つけられて以降、帝国主義世界支配を米帝が基軸国となり、この米帝戦略にソ連スターリニストが屈服して成立した世界である。それは第一に、一方では米帝国主義のヨーロッパ日本革命の圧殺を基礎に、他方では植民地諸国に対する侵略反革命支配体制の強化した戦後世界帝国主義体制の確定、第二にソ連スターリニストによるヤルタ分割協定の制定によるギリシャ革命等に対する直接的裏切りと東欧人民

のプロレタリア独裁への要求を歪曲したスターリニスト的人民民主主義革命という形におけるソ連圏の確定、第三にこの米ソ平和共存体制に対決する政治的性格をもって闘い抜かれた植民地民族解放闘争の永続化、階級危機の永続化（中国革命、朝鮮革命、ベトナム革命の前進、中華人民共和国の成立、朝鮮人民民主主義共和国、ベトナム人民民主主義共和国の成立）と特徴として成立した。

とりわけ現代過渡期世界の成立は現代帝国主義における国際反革命同盟の役割の決定的重要性という意味において、中国革命の成立による「不動の労働者国家の体制としての確立」を決定的メルクマールとしている。

① 米帝国主義は他の敗戦帝国主義、疲弊した帝国主義に比して、圧倒的政治経済軍事力量を有し、戦後における帝国主義世界体制の防衛と確立の盟主として君臨し侵略反革命世界戦略を唯一自国の利害と結合させ貫徹しえた。（以下口述）

② 旧植民地諸国は第二次大戦後における帝国主義宗主国の弱体化の中で民族独立運動を強化し、アジア・アフリカ諸国においてこの闘いを前進させた。（以下口述）

③ 労働者国家においてはまずソ連スターリニストによる東欧革命のスターリニスト的収束、人民的議会議主義（ソビエトの否定）をもつてのソ連圏の確立、ソ連一国社会主義建設のための東欧各国経済の解体、経済的にコメコン、政治的にはワルシャワ条約機構、軍事的にはワルシャワ条約軍の創出というものである。（以下口述）

④ 現代過渡期世界の危機の構造化と世界プロレタリア人民の闘いの前進

① 現代過渡期世界の危機の第一は、植民地諸国における階級闘争の激化、別の言い方をすれば帝国主義諸国の植民地支配体制の崩壊的危機である。（以下口述）

② 第二には、帝国主義の不均衡発展の激化による帝国主義間対立の激化、帝国主義間矛盾の顕存化である。（以下口述）

③ 労働者国家内部における階級矛盾の激化とスターリニズムの分解
ソ連……一国社会主義建設の自己目的化は、重化学工

業化の一面的重視、農業の切り捨てというなかで深刻な農業危機という事態を生み出している。

（以下口述）

中国……「大躍進」政策の挫折のなかで、打ち出された中間主義的な工業化政策はブルジョア実権派を生み出し、一国経済建設は様々な形で矛盾につき当たった。（以下口述）

④ 世界同時革命に向け3ブロック階級闘争を結合させ、全世界帝国主義打倒の革命戦争を開始せよ。

しかもこの3ブロックの階級的危機の進行がバラバラに展開されているのではなくして、現代過渡期世界の構造的矛盾としてそれぞれ結合されて立表われているのである。それは現代過渡期世界があくまでも、①帝国主義の国際反革命同盟の強化、②スターリニズムのこれへの屈服とソ連スターリニストによる帝国主義の支えという構造を基軸として成立している世界であるからである。

すなわち現代過渡期世界の危機の様々な諸要素は現代過渡期世界の構造的特性を媒介に実現されるのである。その意味ではレーニン帝国主義論の古典的内容とはその危機の発現形態を異ならせているのである。まず第一に、帝国主義は統一的世界市場の拡大の物質的基礎の喪失にもかかわらず、換制的拡大を試み、帝国主義世界体制存続の物質的基礎を獲得せんとする。すなわち各国帝国主義のなしくずしブロック化による対立、抗争を孕みながらも国際反革命同盟を強化し、侵略反革命戦争（主要には植民地革命の圧殺）を全面化させ、過剰資本、過剰生産力の処理を実現し、自己の絶望的安定化を求める。ニクソン巻き返し戦略以降の全世界帝国主義の基本路線は中国を平和共存に固定化させ、ケネディ反革命戦争拡大政策を大きく上回る、再度の全面的な侵略反革命の開始、戦争形態の貫徹による延命を射程に入れたものであることは明確であり、現在の局面はそのための一定期間といえるのである。過剰生産、慢性的不況、大量の失業者群、国際的インフレ、世界経済の収縮、かかる危機の突破の方向性を侵略反革命戦争の全面的拡大に設定していることは明

明らかである。

従って現代過渡期世界の危機の発現形態はレーニンが帝国主義論で明らかにした基本パターンをそれとして純化して行うのではなく、革命の主体的戦略として捉え返した場合、レーニン「帝国主義戦争を内乱へ」というものとは異り、帝国主義戦争以前に階級的危機が成熟し、この「前期的に成熟する階級危機を階級決戦プロレタリア革命の達成」としていくというものでなければならない。すでに17年ロシア革命以降の階級危機が29年恐慌を経て、階級危機を激成するなかで日本・独・伊においては労働者国家への突撃勢力たるファシズム反革命の勝利に帰結してしまった如く、過渡期世界における帝国主義の侵略反革命の全面化はファシズム的統治形態を不可避に要求するのである。しかも30年代的危機とは異り、帝国主義世界体制の防衛を第一の結集軸とする現代過渡期世界における各国帝国主義は統一的世界市場の分断→ブロック化、勢力圏形成→帝国主義戦争へとというのではなく、帝国主義世界の防衛→国際反革命同盟の強化→対労働者国家、植民地人民の革命戦争に対する侵略反革命戦争の全面化という危機の形態をとらざるをえず、帝国主義が目ざすファシズム的統治形態もあくまでも国際反革命同盟の一翼として一国の階級的危機を反革命的に圧殺することを通して絶望的に延命していかんとするのである。もしこの「前段階階級決戦」に敗北するならば、侵略反革命全面戦争＝第3次帝国主義全面戦争を許し、全世界プロレタリアートの危機のみならず人類の絶滅へと発展することは必死であるといえる。

今日の帝国主義諸国ブルジョアジーのこの侵略反革命戦争に向けた「上からの内乱」攻撃を強め、内乱のヘゲモニーをもって、革命的左翼、人民戦線派を粉砕し、新たな官僚—警察—軍隊を全面化させた統治形態への転換をおし進めんとしている。従ってわれわれの革命戦略上の任務は「帝国主義の侵略反革命全面戦争以前に成熟せざるをえない階級危機、それも国際的なそれ」を危機の前期的成熟と階級決戦の絶対的不可避性としてはっきりとおさえ、革命的な内乱期を切り開く

ために全力で闘い抜くことである。

<現代過渡期世界における世界革命戦略テーゼ>

基本テーゼ

- 世界同時革命の下、帝国主義、植民地、労働者国家、3ブロック階級闘争を世界プロレタリア独裁—世界共産主義の勝利へ
- 帝国主義の侵略反革命に抗し、国際階級危機を世界革命に転化せよ

三ブロックテーゼ

帝国主義

- 帝国主義の侵略反革命に抗し、内乱—蜂起、内戦を勝ちとれ

- 安保—NATO国際反革命同盟粉碎、安保軍—NATO軍解体

- 自国帝国主義打倒、プロレタリア独裁樹立—世界革命戦争開始

植民地従属国

- 民族解放—革命戦争を推進せよ
- 帝国主義宗主国との2国間同盟（協定）粉碎
- 反革命軍事カライ政権打倒—プロレタリア独裁建設
- 労働者国家

ソ連派ソ連圏

- スターリニスト官僚打倒、革命的プロ独復活
- ワルシャワ条約機構解体、ワルシャワ条約軍解体
- 世界革命根拠地国家連邦建設、世界革命戦争開始
- 中共派

原則的党内闘争貫徹、革命的プロ独復活

世界革命根拠地国家連邦建設、世界革命戦争開始

3章 日本帝国主義の危機と革命的情勢成熟の不可避性

① 日本帝国主義の危機の物質的基礎

- ① 日米両帝国主義の不均等発展の激化、日米対立の顕在化。

統一的世界市場の拡大の物質的基礎の崩壊、世界的な過剰生産力、過剰資本の形成、なしくずしブロック化、独自侵略反革命の方向性。

㊦ 日米両帝国主義によるアジア支配の危機。ベトナム反革命戦争の敗北。ベトナム・インドシナ・アジア諸国における民族解放闘争の前進。

日帝にとってはタイ・インドネシア、南朝鮮の反日闘争、日本人排斥運動の圧倒的高揚としてある。

㊧ 日帝の戦後的経済発展の破綻。資本の有機的構成度の高度化、体制的合理化を伴もにしたがらの重化学工業化（鉄鋼、石油化学、造船、自動車）の完成、金融触寡頭制の確立。

過剰資本、過剰生産力の形成、慢性的不況、慢性的インフレ、大量の失業者群、労働者人民の生活破壊の進行、又とくに石油危機に示される資源危機や食料危機、経済の軍事化

㊨ 戦後民主主義的統治形態が完全にツケとなってきたこと。議会制、労働組合、各種の人民の生活と権利を守る機関や制度、一切の民主的諸権利のそれとしての運営の物質的基礎を失う。

㊩ 日本帝国主義の労働者人民攻撃の基本軸

㊰ アジア侵略反革命、他民族抑圧、朝鮮植民地化攻撃 —レーニン帝国主義の侵略—

㊱ 侵略反革命体制構築

被抑圧人民に対する差別・抹殺攻撃—差別・分断排外主義のいけにえにせんとする。帝国主義労働運動派の形成—権力基礎とする。

—レーニン帝国主義の寄生性腐朽性—

「上からの内乱」の攻撃、統治形態のポメパルチズムの転換を開始しはじめる。既存の秩序体系に戦後民主主義的統治形態のなしくずしの解体、再編攻撃。小選挙区制、刑法改悪、官僚—警察—軍隊による暴力的独裁体制の全面化、「域内平和防衛—内乱の回避」、革命勢力に対する暴力の発動、鎮圧。

㊲ 労働者人民に対する生活破壊の攻撃

インフレ、賃金抑制、生活と権利のハク奪、公害

㊳ 党—革命勢力の前進による、革命勢力の定着化

安保—沖縄闘争。狭山闘争、三里塚闘争、本山闘争の社会的勢力としての規定力の獲得、日本階級闘争における公然たる政治勢力の一角にくり込む。

4章 70年代中期戦略的反攻戦取に向け戦略的総路線をおし進め、革命党の五つの義務を遂行せよ

すでに3章で見てきたように、日本帝国主義は現在過渡期世界の構造的危機と矛盾の爆発、戦後帝国主義世界体制の崩壊の危機という歴史的現実に規定され、矛盾の累積と爆発、危機の激化に直面し、その根底よりの崩壊的危機にたたき込まれている。この中における日帝の70年代的延命策、アジア侵略反革命、国内差別分断攻撃の激化に「革命党の基本戦略的総路線」革命党の五つの義務を掲げ、断固として対決していかねばならない。

① わが同盟の基本戦略、戦略的総路線

○世界同時革命の旗の下、帝国主義・植民地「労働者国家」3ブロック階級闘争を世界プロレタリア独裁—世界共産主義の勝利へ。

○帝国主義の侵略反革命に抗し国際階級危機を世界革命へ転化せよ。

という世界革命の基本戦略の下に、日本革命の戦略的総路線を、

○日米反革命同盟粉碎—日本帝国主義打倒—日本プロレタリア独裁樹立

○闘うアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命を攻撃的国内階級突撃に転化せよ

○「上からの内乱」攻撃に対決し、革命的内乱—蜂起内戦を勝ちとれ

○沖縄解放—安保粉碎—日帝打倒・米帝放逐

○朝鮮植民地化攻撃阻止—日帝打倒・南北革命統一

○部落解放—XXXXXXXXXX—日帝打倒

として確定し、闘い抜くことである。

まず第一の「日米反革命同盟粉碎—日帝打倒—日本プロレタリア独裁樹立」のスローガンは現代過渡期世界における帝国主義の国際反革命同盟の政治的性格、

すなわち日米反革命同盟を日本帝国主義存続の不可欠の条件として把え、これとの闘いを直接日帝を打倒し

ていくという観点から闘い抜くことである。言いかえ

れば日米安保同盟を日帝の権力性格、権力基礎として

すなわち権力問題としてとり扱うということである。

これは同盟9回大会を具体的に継承することとしてあ

る。日本革命の基本戦略的性格をもつ。

第2の「闘うアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦へ転化せよ」、第3の「上からの内乱攻撃に対決し、革命的な内乱一蜂起・内戦をかちとれ」というスローガンは共に日本革命の直接的意味における総路線的スローガンである。第二のスローガンは日帝のアジア侵略反革命の絶対的不可欠性の革命論的把え返し（レーニン帝国主義論の継承）、これに対して闘い抜く、アジア人民に対する帝国主義的抑圧人民族としての責任の問題、すなわち帝国主義的抑圧民族内プロレタリアートの血債の問題（レーニン民族植民地問題に関する理論の継承）であり、具体的に日本帝国主義に対して、国内のプロレタリア人民が激級激突を無数に組織し、実態的にアジア侵略反革命ができなくさせることである。そして第二のスローガンはただちに第三のスローガンに直結するのである。すなわちレーニンが提起した「帝国主義戦争を内乱へ」の戦略スローガンの後半の中身を現代過渡期世界の革命という内容を踏まえて革命論的に深化させたスローガンなのである。つまり日帝は戦後民主主義体制を域内平和防衛の名の下になしにくずし的に再編(?)、これを小選区制度をもってする革命派圧殺のための政治的反動と暴力と結合させて、人民攻撃をかけてきているのであり、われわれがこれに対して逆に域内平和そのものを粉砕して（すなわち日本国民の分裂）革命的な内戦を勝ちとることは決定的に重要なことなのである。又そのことを通して、武装蜂起一権力奪取の陣地を構築し、武装蜂起一権力奪取をただちに内戦の開始・世界革命戦争の開始としてとらえていくということなのである。

現在、塩見君などは「内乱獲得」ということに対して、革命戦争という無規定な用語を使って反対しているわけであるが、彼ら蜂起・戦争派には域内平和そのものをぶち破る、別の言い方をすれば社会排外主義者平和主義者を粉砕する公然たる勢力を作り出す闘いの決定的意義が理解されていないし、更に帝国主義国家の権力構造がもつ、日本における武装蜂起の決定的意義が全く無視されているのである。（9回大会世界革

命戦争路線の反省と革命論的深化）

第四の「沖縄解放—安保粉碎—日帝打倒・米帝放逐」とは、沖縄解放闘争そのもののスローガンであると同時に日本革命の重要な水路を切り開く戦略スローガンである。ある意味では日本革命の戦略を巡る基軸をなしているといえるのである。それは沖縄解放闘争のもつ基本的性格が日米両帝国主義の極東支配体制の瓦解—日米両帝国主義の打倒をその闘い—直接性において持っているということを決定的メルクマルールとしている。又、日帝の朝鮮植民地化攻撃の体制的基礎をなしているのである。（5.15侵略反革命体制）。しかも我々にとっては本日本排外主義、大大和排外主義と闘い抜くという独自の課題をも鋭く突きつけているのである。

例えば、革共同中核派は「反帝、反スタ戦略」なるスコラ的一国主義を本質としているが故に「沖縄の人は日本人か否か」という反動的問題の立て方をし、「彼らが日本人で県民である」ということをもって、日帝の沖縄差別支配を容認し、日本民族主義者、社共、カクマルに加担しているのである。又彼らの日本革命の最短の水路としての沖縄奪還論は、岩田式世界資本主義論の日帝、スタ、体制間矛盾論的改作としてあり、日米国際反革命同盟の再編、強化とこれに対する沖縄人民の決起の中で具体的に完全に破綻した。彼らの「二つの11月の勝利」なる内容は実はこの沖縄奪還闘争の総破産の上になり立つ架構でしかない。又マル青同はそもそも沖縄解放闘争の原則的意義など始めから考えたこともなくせに「沖縄闘争は何の意義もない」という形で沖縄人民の闘いに敵対しているのである。

第五に「朝鮮植民地化攻撃阻止—日帝打倒・南北革命統一」のスローガンは日本革命と朝鮮革命の結合する方向性を日本プロレタリア人民の側から明らかにした内容である。その意味では第二のスローガンの朝鮮革命に対する関わり具体化ということができる。我々日本プロレタリアート人民は最も具体的に実現されている日帝の朝鮮侵略反革命を日帝打倒の戦略的方向性

の下に絶対に阻止しなければならない。文字通り口先ではなく「帝国主義的抑圧民族の血債」の内容が具体的・現実的・直接的に問われているのである。キーセン観光に象徴される帝国主義的墮落を差別者日本人を射ての闘いとして実現しなければならないのである。

又、戦略問題としてある日帝打倒の方向性に関しては南北朝鮮人民の真の解放としてある南北のプロレタリア革命による統一との連関の中でおし進めなければならないといえるのである。

第六に、「部落解放—XXXXXXXXXX—日帝打倒」のスローガンは部落完全解放のスローガンであり、それは帝国主義段階におけるプロレタリア革命の闘い方を問う決定的スローガンである。いうまでもなく、現代資本主義は帝国主義段階に突入しており、帝国主義は自己の本質的屬性として外に対しては侵略他民族抑圧、内に向っては腐朽性、寄生性の強化、労働貴族の発生、差別、抹殺攻撃に曝される被抑圧人民を強めざるかえない。これはカクマルや日共せ社会党などの差別者集団がいう「政策的に残している」というものとは全く異なるのである。つまり帝国主義は自己が決して解決しえない本質をもっており、その意味で資本主義の最後の段階なのである。

逆に主体の側から言えば、この部落解放闘争の勝利を勝ちとることができるといえる。われわれは帝国主義段階における革命XXXXXXXXXX革命の階級的基礎を構成する被抑圧人民の組織化の問題、そして特にこれは重要なのであるが、一部労働貴族のみならず、労働者人民が差別—排外主義にどっぷりとつかっているという否定的事実のなかで、とにかく帝国主義段階におけるプロレタリア革命をなしとげる労働者人民、被抑圧人民の階級的・人間的団結獲得しうる闘いとは何かという問題として設定し、これに答えなければならないのである。部落解放闘争はその最重要な環なのである。

① わが同盟の革命党としての五つの義務について

第一に「上からの内乱攻撃」に対して階級激突をかちとること。現在おし進められている支配階級の側からの内乱攻撃に対して階級的激突戦を無数に組織することをもってわが革命派が内乱のヘゲモニーを奪取することである。戦後、民主主義体制の物質的基盤の喪失という事態の中で、帝国主義ブルジョワ派、人民戦線社会排外主義派、プロレタリア革命派の3つどもえの闘いは増々激化せざるをえないのであり、この激突（逆に主体の側から言えば）続く。この部落解放闘争は日帝XXXXXXXXXX完全なる解放を勝ちとることができな

を恐れることなぬ闘い抜き何としてもこの内乱のヘゲモニーを奪取していかなければならない。


第二に、帝国主義抑圧民族内部のプロレタリアートの「血債にかけ」アジア人民に連帯することである。本年1月の田中の東南アジア訪問に対するタイ、インドネシア人民の決起、あるいは日帝—朴体制に永続的に闘い抜いている南朝鮮人民に全ゆる形で連帯することである。今日の日帝のアジア侵略反革命政策に、逐一全力で闘うことである。閣僚の訪問はいうに及ばず、経済開発会議、経済協力会議、合同閣僚会議の全てに一早く対応しこの粉碎のために全力をあげることである。又在日朝鮮人に対する差別襲撃に対して防衛隊を具体的に建設し、反革命右翼と実力をもった闘いを実行することである。

第三に、武装闘争を拡大させ人民の総武装をおし進めることである。街頭闘争における旗竿戦等は勿論のこと、自己の職場、学校、地域で権力とその手先に対してできるだけ暴力性を発揮し闘い抜くこと。口先だけでなく実力闘争の暴力的展開を組織することこそ、70年武装遊撃戦勝利」の条件を形成することになる。例えば、職場でストライキがおこったら職制実力弾効から始まり、自衛武装の強化というところまで組織すること。

第四に、社会排外主義者を殲滅し抜くこと。社共、カクマルと最も激烈に闘い抜くことである。社共、カクマルは朝鮮問題において「韓国、朴ファシヨの日本への介入反対」とかいて大国主義、排外主義の先兵である。狭山闘争においては日共、カクマルが同盟を先頭とした闘う部隊を襲撃している。労働戦線においては日共・民同が労働者の生活権防衛のための闘いを否定し、完全なる資本の味方となっている。社共・カクマル域内平和主義者の社会排外主義への転化は帝国主義の攻撃に基礎をおいている。帝国主義段階の革命において帝国主義段階の歴史的特性に物質的基礎をもつ彼らを殲滅することは不可欠の絶対的課題である。

第五に、日和見主義、経済主義を粉碎して、日帝打倒の革命勢力を早急に創出していくことである。特に今日、旧3派、旧8派の闘いがことごとく清算され、四トロ、プロ青などという階級的高揚期にはどこにいたかもわからない右翼分子が伸長している中で、この闘いは非常に重要性をもっているのである。とくに四トロ、プロ青は日向反革命とともに「9.19社共集会」に加担したのである。この具体的事実こそ彼らといえるのであり、この日帝打倒の方向性の下に闘われてこそ（後本文に続く）

の社会排外主義への転落・墮落の決定的メルクマールを形成している。又この9.19排外主義集会加担3派を中心に、11/18 様々な経済主義者連合が野合して、大右派連合が形成されたわけであるが、これとて、9.19集会加担の延長にある以上、極めて日和見主義的、経済主義的性格をもっているのである。しかもこの四トロ、プロ青に代表される日和見主義、経済主義の潮流、すなわち70年代の沼地派ブロックは70年代階級闘争が激烈になればなる程、口先では左翼的なことを言い、その実絶対に武装闘争などやれない潮流として反動的に固定化されていく根拠をもっているのである。例えば、解放派などは沖共闘の意義を踏まえれば、このような無原則な潮流に参加すべきではないのである。

我が同盟はこの革命勢力統合の任務を現在のノロ火派どう派との3派共闘を原則的に発展させることの中から赤軍派諸グループ、遊撃派（情況古賀派等）ブンド系の政治闘争派の総結集をかちとり、更には中核派、解放派、等を統合して闘い抜いていく決意なのである。

④ 75年沖繩海洋博粉砕闘争を武装闘争再開の突破口となし、70年代中期戦略的反攻戦の着実な第一歩とせよ。（以下口述）



五章 日向一派、カクマル主義者と闘い抜き戦闘的労働者・被抑圧人民に立脚した同盟戦旗派建設に勝利せよ

70年代、日帝の侵略反革命・差別分断攻撃の激化、総じて「上からの内乱」攻撃の激化に内乱のヘゲモニーを革命派が奪取し、革命的内乱期を切り開いていくためにはこの任務を担い抜く「気風」と「能力」をもつ革命党を作り出していく以外ない。日帝の「上からの内乱」攻撃に屈服し、カクマル主義へと転落し同盟戦旗派建設の意義を清算していつた日向一派との徹底した分派闘争の中から革命党建設を勝ちとらねばならない。又同時に党建設の独自の闘いを否定するブンド系諸派の経済主義を粉砕し、革命党建設を勝ちとつていくことである。

② 二次ブンド系諸派の破産と戦旗派結成の歴史の意義とを鮮明にし、革命的前衛党建設に進撃せよ

69年7/6和泉事件を契機に第二次ブンドの公然たる分裂は開始され、70年6月叛旗情況、70年12月野合右派（関地区、左派、仏派）の党建設からの脱落の中でわが同盟は70年4月その分派の端緒を形成し、71年本格的な同盟（戦旗派）へと党建設の歩みをすすめたのである。わが同盟は69年夏同盟九回大会が勝ちとられたにもかかわらず、密集した党建設は何ら進められず九大会諸分派が党建設と結合した九大会路線を押し進めることができず、安保決戦を全同盟を掲げて闘い抜くことができず、革共同中核派に大きく遅れをとり、しかも党建設の統一的止揚にも敗北するという否定的事態から出発したのである。

従つてわが同盟（戦旗派）の分派的立脚点とは九大会路線を継承しつつも、この大会の諸内容を大きく乗り越えるものとして確定した。それは第一に、党組織建設そのものに関する事柄であり、これと関連して第二に、スターリン主義との闘いの問題であった。なぜなら九大会においては党建設の路線、あるいは組織戦術に関する内容に関しては殆んど触れられず、せいぜい「政治過程論批判」「ルカーチの階級形成論批判」という抽象的内容にとどまっていた。又、綱領的立脚点においても、スターリン主義の一国社会主義可能論を批判しつつも革命的論的には深化されておらず様々な形でスターリン主義への屈服を生み出した。これに対しわが同盟は、第一に綱領的立脚点をコミンテルン六回大会（スタ・ブハ綱領）において完成されたスターリズムとの訣別の闘いにおき、第二に戦術・戦術上の一基底をなす現代世界の対象認識を帝国主義段階論の確立の中に追求し、第三に組織建設を、組織建設における機能主義的理解（これこそ第二次ブンドの致命的欠陥で

ある）と闘い党建設の独自の闘いを実現しうる組織観、組織規律を獲得することとして設定し、闘い抜いてきたのである。

これに対して今日の第二次ブンド系の諸派は、革命的前衛党建設の道を歩むのではなくて、相も変らず二次ブンド的地平にとどまり、離合集散を繰り返しているのである。総体の分派闘争の現状からいえば、二次ブンド分解時において諸分派が軸とした政治的傾向を徹底させながら再分裂を繰り返している。各分派は自己の個別的傾向を徹底してブンドと無縁になるか、あるいはもう一度第二次ブンドに先祖返るかという形において再分裂を惹起させており、潮流的には原則的に政治闘争を堅持する傾向と戦闘的組合主義的傾向（労働運動主義）、無政府的軍事闘争主義的傾向という三傾向に分解している。

まず第一に関西ブンドである。二次ブンドから赤軍、関西地区に分解、その後関地区は赤報とのろしに分解、のろしは中央と小西Gに分解という形で無限の分裂を繰り返している。綱領的には「反社帝」を掲げ、スターリン主義との闘いを曖昧にし、中共派に屈服し、組織上においては殆んど解党一大家運動を主張する経済主義そのものである。党組織建設の独自の闘いを実現しているところはどこもなく、自称「軍隊」の指導部、労働組合の指導部を党といっているにすぎないのである。一応党建設を主張しているのはのろし派以外なく、党組織建設上においては極めてさんたんたるものである。まずのろしは戦闘的労働運動の総括を結集軸にする六回大会ブンドの域を出ず、その左翼的反撥としての小西Gは赤軍に吸収されんとするという無責任振りである。赤軍派は第一次赤軍の敗北、連赤における根底的敗北、その反動としての臨総派の抬頭、これに対する左からの反撥としての日本委員会派の登場という経緯を経ながら結局七回大会に回帰せんとする日本委員会と労働運動G派としての臨総清算派の残存という形をとっている。又、TG、FK派は党を解体し、戦闘的組合運動、戦闘的労働運動Gを形成している。TG派は現在大右派連合の一翼に労活を通して関わるといふ反動的姿を示しているのである。

第二に東京のブンド諸派である。叛旗派はわが同盟との分派闘争に敗北して以降、政治闘争に登場することすらなくなつたのであるが、インフレ阻止を階級闘争の主軸とするというカクマル以下の経済主義路線に純化しているのみならず立大における女性差別事件に表われたごとく小ブル排外主義的墮落を強めているのである。又、情況は松本派と古賀派に分裂、松本派は労活を日本労組ナショナルセンター化し日本階級闘争の司令部化しようという経済主義的幻想をもつており、古賀派は六大会七大会ブンドに先祖返らんと、仏のコケたメンバーとの野合を追求している。仏は召還主義路線の行きづまりによ

つて、もはやどこにいても鮮明ではない現状である。その他ドトウ、前衛については前者がカクマル的論理主義で空論主義、右翼日和見主義を基軸としており、後者は戦闘的経済主義を純化している。総じて真に日本革命を担い切る中央集権党を建設せんとするところは全くないといえるのである。

⑤ 社会排外主義者。差別者集団Ⅱ日向カクマルを血債にかけてセン滅し、革命的前衛党建設に勝利せよ

まず最初に確認されなければならないことは、日向一派との分派闘争が他ならぬ党組織建設を巡る分派闘争でありこの闘いに勝利することなくしては本格的な革命党は建設できないということである。すなわち日向一派との闘いは党建設をブンドを継承して発展させるのか、カクマル的に歪曲するののかという政治的性格をもつた闘いなのであり、もし同盟がら反革命的集団カクマルを生み出し存在せしめるならば、同盟の責任が全人民に徹底的に問われることになるのである。日向一派の政治組織的性格を確認するならば、第一に党建設に関して党と階級の区別を徹底して曖昧にし党建設の独自性を否定する解党主義思想を根本にすえ、第二に党の戦闘的展開Ⅱ闘いというものの意義を認めず、政治闘争・武装闘争を闘おうとせず学習会運動・サークル運動に党の実践の基軸を置く右派であり、第三にこれが最も重要なことであるが、被抑圧人民・被差別大衆の闘いに對しては口先だけの「血債」でしかなく革命的の前衛党Ⅱ革命的共産主義者の「血債」に「連帯する闘いを戦線主義と称して一切否定することにある。例えば部落解放闘争、沖繩解放闘争における具体的糾弾闘争、実践的連帯と結合ということから逃亡し何らの思想的把え返しもないということである。現在、旧戦旗以来日向派にいつた部落解放闘争の活動家が全員コケてしまったという処に彼らの結集軸と政治的性格の反革命性が端的に表現されているのである。又、彼らは思想的腐敗のみならず、理論的にもカウッキーばりの共同反革命論の超帝国主義論への純化、帝国主義段階論を否定する不朽性論としてカクマル、四トロにオルグられる傾向を強め、革命的左翼の敵対分子、社会排外主義、人民戦線派へと転落しているのである。

日向一派はわれわれとの同盟組織内闘争、日本反帝戦線内闘争、蜂起プロ独派内闘争に敗北しその日和見主義、経済主義を全面開花させ、ブンド九回大会の政治的水準から完全に脱落し叛旗、情況派以下のサークル主義集団になり果てている。日向一派の脱落と逃亡の現実には以下の事実の中にある。それは第一に日本階級闘争に問われる歴史的主体的課題からの逃亡である。三里塚前線からの敵前逃亡、あるいは部落大衆の具体的闘いに対する支持共闘からの逃亡、沖繩人の闘いに対する支持連帯の闘いからの

逃亡、「障害者」解放闘争からの脱走、入管闘争、女性解放闘争からの逃亡等、被抑圧人民、民族、被差別大衆の具体的闘いに対して、己の歴史的負債を血債する真実の真剣を闘いからの一切の逃亡ということである。第二には口先では「血債」とか「自己批判」とか言いながらその実「不治の病は患者が悪いからだ」「病気になるのは本人に責任があるからだ」という「障害者」差別を露骨にし、また「石川青年のクビカシロカが問題ではない」「石川青年は無罪になるでしよう」という形をもつて部落大衆の闘いに公然と敵対するという差別主義的、排外主義的体質を強めてきているということである。第三にその差別体質を陰弊するために毛沢東の諸提起を実践を抜きにした認識論主義的に歪曲し、マル青以下的水準に転落し、レーニンの諸原則に敵対する経済主義的、サークル主義集団になつていくこと。

つまりこれらの諸事実を総合して判断すれば「自分達は日本階級闘争の最前線では戦う能力も気力もない、第二戦線で随伴者としてやらせてもらいたい」というブンド主義の粹までもカクマルに解体された右翼日和見主義、経済主義の一言に尽きるのである。結局、右翼日和見主義者日向の頭には「思想集団、啓蒙集団でどんなに右派であつてもカクマルの様に大きな党は作れる」という虚妄があることは明らかであり、今後の日向一派の進むべき道は差別主義、排外主義的純化をとげてカクマルに吸収されるか、構改、四トロの如き日和見主義潮流になりちよう落分解していくかどちらかである。

9. 19 右派連合に参加し日本階級闘争を日和見主義、経済主義の沼地へ導びかんとする日向一派、彼らと闘い抜かない限り我々自身が腐敗してしまうのである。その意味では部落差別、「障害者」差別を「不治の病」「バカ」という形で平然と自己の機関紙で掲載し煽りたてている日向一派に對して、わが同盟の思想性を問うものとして、真実にセン滅しえるかどうかということが問われているということである。又わが同盟は歴史的負債にかけてこの反革命差別者集団日向一派を粉碎していく決意である。

◎ 第三次ブンド建設の責務にかけて、全国中央集権党を建設せよ

第三の任務は、現在おし進めている同盟（戦旗派）建設を全国各地に実現し定着化させることである。第二次ブンド系諸派は再分裂を繰り返し、縮小再生産し、純粹の地域サークル化している中でわが同盟こそブンド十余年の歴史的苦節を引き受けきらなければならぬ。わが同盟は、レーニンが「なにをなすべきか」で明らかにした党建設の意義とプランをはずきりと主体化し、職業革命家・労働者革命家の結合した党、中央指導部建設・細胞建設を党の基本骨格とした党建設に突き進まねばならない。

未だ東京―九州―新潟―沖繩等の限られた党建設

の限界を早急に克服し、関西をはじめとして委員会建設に着手し、全国党を作り出す決意である。

④ 政治的・組織的規律を強化し鉄の前衛党建設に勝利せよ

この問題は党を組織実体的に作り出していく内的基礎の事である。この組織規律獲得の闘いの勝利なくして党組織を建設することはできない。関西ブンドの諸君は党建設を主張しても、この党建設をなしとげる方法を理解しえないのである。特に今日関西ブンド系諸派を風靡している「資本主義批判・綱領獲得」の闘いと称せられるものは、自己の党建設の実践と結合することがないため平連的を啓蒙主義として立ち表われてくる以外ないのである。

われわれはレーニンが「何をなすべきか」において提起した党規律の問題、すなわち党組織建設の組織的根拠とは「民主主義以上のあるもの、つまり革命家の同志的信頼関係の確立」であるということを党的規律の基礎においてきたのである。党的規律を別の言い方にすれば、それは党的団結ということである。又最も具体的に言えば、革命的共産主義者が党組織を構成し、党組織を建設せんとする時の原則の問題であり、この党的団結を自己がいかに主体的に担っていくのかという問題なのである。つまり党員が組織規律を自己規律として主体化し、主体化された自己規律が組織規律を強化していくという弁証法的関係のことなのである。従つて自己規律に支えられない「外的強制」としての組織規律は崩壊するのである。

更にわれわれは党建設の仕方を思想闘争、理論闘争、組織闘争、路線闘争として設定し、それぞれ独自の闘いを貫徹してきたのである。第一に思想闘争とは、闘いの中で闘う主体が思想変革、人間変革をとげていくことである。革命的前衛党は労働者階級のみならず革命的自己変革をとげた様々な階級階層の出身者によつて構成される。この思想闘争とは自己の生まれた時点からの自己史（例えば出身階級、職業、性別、年令、家族環境、学歴の違い）の個性を越えて、党的に団結しうる根拠なのであり、平たくいえば個人の価値観、人生観を変革することなのである。例えば民族差別、部落差別、女性差別などの闘いはこの思想闘争を通じた自己の小ブル的価値観を打破しえない限り真に担うことができない。特に関西ブンド系の諸君はこの思想闘争の意義に関して殆んど理解しえないのである。

第二に理論闘争である。階級実践における様々な直感や感性をマルクス・レーニン主義の諸原則と正しく結合させ理論化することである。又思想闘争課題を革命理論的に対象化することである。この事を通してのみ科学的マルクス主義に導びがれた、正しい綱領・戦術・組織が確立される。理論活動の独自性

第三には組織闘争の実践である。思想闘争、理論闘争、路線闘争もこの組織闘争と結びつかない限り、党の内容として発展しえない。せいぜいインテリの理論に終るのである。組織が組織闘争を組織する限り、組織的強化をなすことができる。又別に言えば組織構成員が組織闘争主体として参加することを通して、組織的団結は強化される。その規範として党規約はあるのである。ボルシエビキとメンシエビキの分裂の環をなしたものはこの組織闘争主体の資格をめぐるのであつた。

第四には路線闘争である。当面する情勢と主体的条件を分析するなかで闘いの環を設定し全力で闘い抜くことはレーニンの「計画としての戦術」の意味である。具体的闘いの基軸を提起できないところは単なるサークルや啓蒙集団でしかない。この路線を獲得する闘いを通して革命党の人民に対する指針を明らかにすることができるのである。

この四つの任務は、それぞれ独自の領域を持ちながらもバラバラにあるのではなく結合されている。この四つの闘いは前衛党建設のための不可決の側面なのである。

さてここでいま一つ強調しておかなければならぬことは、全ゆる差別主義、排外主義と闘い共産主義者の党としての原則、作風、気風を作り出していくことである。この問題は日向一派との分派闘争の基軸をなしたことなのでとくに触れなければならぬ。今日日向一派は口先だけではいろいろ言っているわけであるが、結局以前戦旗派が落ち込んだ排外主義的陥弄を一步も前進しえないでいる。それは第一に日向一派が差別をしていること自身の自覚的把握返しを、差別との闘いの主体的実践と結合させようとしていないところにある。具体的に言えば、戦旗派が組織的根拠をもつていた部落解放闘争、その内部における部落産業防衛・生活権奪還の具体的闘いから逃亡し去つたということである。これは彼らの差別との闘いというものが単なる政治主張一般として宣伝的に言われているだけであり、主体の危機をかけた命がけの飛躍というものは全く無縁だということである。第二には党の組織活動領域の拡大とである。彼らは前提に「戦旗派建設は急進的すぎた。今度はゆつくりやろう」という清算主義を組織的基軸としているわけであるが、相も変らず学生サークル的闘い込みの域を出ていない。つまり党員が組織活動をする際に、その組織活動が全人格を決定し、その人間の全生活を決定していくということである。つまり政治的基準によつてその人間の全生活領域を決定していくということである。例えば女性差別との闘いは、この生活領域における差別との闘いを通して初めて党的団結として獲得されるので

ある。逆の言い方をすれば革命党員は労働者革命家においても文字通り24時間の政治実践としてあるというのである。女性差別者日向はかかる闘いに歩を進めることを恐れる日和見主義者にすぎない。われわれはレーニンが提起した「気風」、毛沢東が提起した「作風」を被抑圧人民への直接的連帯、そしてこのことを党の組織活動の不可決の一環をなす生活規律の獲得として全ゆる啓蒙主義、小ブル自由主義と闘い勝利していかなければならないのである。このことを通して差別者、抑圧者に対する階級的憎悪をうち鍛え、プロレタリアの共同性を獲得していくことこそ問われているのである。

第六章 ま と め

さて、政治集会の基調報告を以下の如くまとめたいと思います。それは第一に「七・七華青闘告発」によつて鋭く突きつけられた帝国主義的抑圧民族としてのそれに甘んじ、帝国主義を支えていたという自己の帝国主義的墮落との闘いに勝利し抜くことではありません。又別の言い方をすればその思想上の闘いに勝利することによつてしか帝国主義段階における革命には勝利しえないということであり、そして又、この思想上の闘いは一切の差別され抑圧され切り捨てられている、被抑圧人民、被差別大衆に対する共産主義者としての「受けとめの態度」の問題であり、全ゆる排外主義、差別主義と闘い抜きプロレタリア人民の階級的団結を強めていくというところの問題であります。

時として構改革の諸君はこの思想闘争を口にするわけですが、具体的な連帯の闘いが忘却されるため、単なる認識運動化され経済主義的沼地に転落していくのであります。中共派も又同様の傾向をもつていくということが出来ます。又、それとは表裏として旧ブンド系の諸君の思想闘争に対する闘いの放棄があります。どとう派などは思想闘争に対する闘いを殆んどなしていませんし、又のろし派も「血債の思想」を充分主体化しているとはいえません。単なる「戦略」なる用語を語ればそれで事足れりとする傾向です。この構改革の諸君と旧ブンド、主要には関西ブンドの諸君がメダルの表裏であることは、この両者の中間主義的性格をもつマル青同の諸君の好んで語る内容に示されています。「受けとめの段階は終つた。次は路線問題だ」という内容です。結局彼らは小ブル的尊大さによつて、被抑圧人民の闘いに排外主義的に敵対していかざるをえない必然性をもつているのであります。

第二には武装闘争を組織すること。又武装闘争を組織する組織的規律を獲得することであり、敵権力の破防法弾圧体制に対して何がなんでもこの反

革命治安弾圧体制を突破し、階級的激動期を切り開いていくことです。この任務は単なる一部の非合法党建設と結びつかない爆弾闘争で果すことはできません。あくまでもそれは全人民的拡がり階級的基礎を持つものとしてなければなりません。全人民の総武装の観点をもち、単なる全共闘や職場委員会の自衛武装を越えて人民を武装させること。すなわち武装遊撃戦の組織化をなしとげることです。しかもこの闘いを革命党が組織するという事です。だからこの革命党は政治警察との24時間の闘いが要求され、この非合法領域における闘いに勝利していかなければならないし、革命党員のみならず革命的人民は革命運動に参加したその時からかかる軍事規律が要求されるのであります。

ブンドを自称している人達の中では、勿論東京のブンド諸派は右派で問題外ですが、口先では組織規律とか軍事規律とかを強調するときがあるわけですが、全人民の総武装を基本とすることに對する無理解、あるいは党が武装闘争を組織するという観点の欠落によつてテロリズム的傾向、経済主義的傾向を克服することができず、組織規律も帝国主義軍隊的ブルジョア能力主義的傾向を内在化させざるを得ないのであります。総じて関西ブンド系の諸君にとつては、思想闘争の独自の意義の否定という致命的欠陥が前提的にあるわけですが、この武装闘争の独自の意義の内容において党が不断に機能主義化し、戦術指導部化せざるをえない内的必然性をもつていっていることが出来ます。

第三に日帝のアジア侵略反革命に抗し、内乱一峰起。内戦へ転化するという戦略的立場を貫き実践するということであり、すなわち日本革命に向けて戦略的総路線を確実に実践するという事です。これに関しては詳しく述べませんが、レーニンの革命論における諸原則を逐一日本革命の内に豊富化して対象化し、戦略論上の正しさを明確に打ち出し、現代過渡期世界における日本革命に接近していくことです。

とにかくわれわれは日帝の体制的危機に対して革命的内乱の時代を切り開くことをもつて解答を与えていかなければならないということなのであります。第四に、これらを実現するために革命党建設に勝利することであり、しかもこの党建設は単なる階級闘争前進のための媒介というのではなく、階級闘争の前進はこの党建設がない限り勝ちとれないという確認こそ重要で、すなわち階級闘争の反映としての党というメンシエビキ党組織観と訣別した党組織建設の闘いの独自性を重要視するという事です。すなわち党としての闘いは党のための闘いに集約され、党組織建設が独自の論理をもつてなしとげられねばならないということです。

ブンドは70年安保決戦の中で党的には四分五裂を

してしまい、革共同中核派に党的にはうち克つことができませんでした。わが同盟戦旗派はだからこそ関西ブンドと革命的に訣別し、党建設の独自の闘いを分派の立脚点としてきたのです。その意味では軍事闘争や大衆闘争を一面的に強調し、これに党建設を従属させ、党を戦闘団化させる、いわゆる自称「ブンド」と訣別し、革命的前衛党の立場に立脚して党建設に前進することこそ、わが同盟の第一の任務といえるのであります。

以上の革命党の任務を全力をもつて実践し、近い将来、必ずや戦略的反攻戦取を闘い同することを同志人民諸君に確約し、基調報告を終わりたいと思います。

一九七四年十二月七日

共産主義者同盟（戦旗派）

連絡先 戦旗社

品川郵便局 私書箱六号
電話 七八二一―八三〇

△定価▽ 一部 百五十円